踏んで踏まれてアンクレット

文屋カノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
踏んで踏まれてアンクレット

【Ｎコード】
Ｎ３６５４Ｔ

【作者名】
文屋カノン

【あらすじ】
カノジョのいる男は絶対好きにならない。そう決めていた由真は会社の先輩である横内に、若菜という女の子の名前のような苗字の男を紹介される。
前評判通り若菜はかなりのイケメンで、フリーだという触れ込みだったのだけど、由真は若菜に女の気配を感じて……。カレシがいるはずの横内も、若菜に対し挙動不審。でも思惑を持った横内の言動によって、事態が思わぬ方向へ流れてゆき……。

（前書き）

第１回さくらんぼ文学新人賞１次審査通過作品です。総応募数は調べたのですが分かりませんでした。１次審査通過作品は４３編でした。

「恋愛に戸惑う２０代のヒロインが上手く描けている。甘い方向に流れない辛口な展開が買える」

との総評を頂きました。

ぜひ皆さんの感想も聞かせて下さい。

彼女のいる男を好きになる女なんて馬鹿だと思ってた。だって世の中には男なんて星の数程いるんだから、そんな中で敢えて相手のいる男に横恋慕するなんて物好きとしか思えなかった。
「それでも、好きな気持ちは止められない」
とか何とか言う女もいるけれど、そんなの自制心が無いだけだと思ってた。だったらあんたは通りがかりの女が身につけてる服やらアクセサリーやらがどうしても欲しいからって、無理矢理ひっぺがすような真似をするのかと呆れてた。
「好きな男を、服やアクセサリーと一緒にするな」
と言われれば
「自分の恋心を、特別視するな」
と言い返した。恋愛感情というものを変な意味で特別視している女が嫌いだった。自制なんて利かないもの、利かす必要がないものとして自分の単なるわがままを押し通す女が嫌いだった。
そこまでわがままを押し通して、いざ人の男を手に入れたところで、その男を絶対後悔させない自信がある女なんて何人いるんだろうと思ってた。そんな女はとてもとても少ないはずで、そして
「絶対、後悔させない」
なんて言い張るような女はやっぱり嫌いだった。そんな自信過剰な女を好きになれる理由が無かった。
けれどそんなあたしにも、意図せずして人の男を奪ってしまった経験がある。
短大生だった頃、バイト先の家庭教師派遣センターで知り合った一つ年上の大学生望月に、誘われるままデートを重ね請われるまま付き合いだした後、酒にしたたかに酔った望月にある夜突然告白されたのだ。
「俺はお前と付き合い始めた時に、実は別に彼女がいたんだ」

と。
望月はあたしと付き合い始めたことによって、古い彼女とは別れてしまったから、あたしと古い彼女がかぶってた期間はほんの一週間足らずだったらしいけど、あたしは嫌な気持ちがした。だってあたしさえ現れなければ、望月はその彼女と付き合い続けていたかも知れなかった訳だから。
あたしの存在が、すでに形成されていて今後も続いたかも知れない人間関係を壊したなんて落ち着かない気持ちだった。その彼女があたしのあずかり知らぬところであたしのことを密かに恨んでいるかも知れないと思うと、枕を高くして寝られない心地だった。望月があたしの欠点を目にする度に古い彼女を懐かしむのかも知れないと思うと、大いに気が滅入った。
翌日シラフに戻った望月を問い詰めると、望月は
「何、俺を酔わせてそんなこと言わせた訳」
とまるであたしが故意にその話を引き出したかのような口ぶりであたしを非難した。冗談じゃない、あんたが勝手に言い出したんだと言おうかと思ったが、何だか面倒臭くて止めにした。
もう終わってしまったこと、知らなければそれで済んだことについて言い争うのが面倒臭かった。あたしは面倒臭いことが嫌いだ。結局人の男を取るのが嫌なのも、ただ単に面倒が嫌いだからなのかも知れない。
でもあたしは面倒を嫌う自分を恥じてはいなかった。面倒を好んで進んで面倒を引き起こす人間の方が絶対にどうかしている。そう思ってた。
けれど面倒を嫌うこの性質、自分の事なかれ主義が、かえって面倒を引き起こす結果をもたらす要因になると知ったのはその半年後のことだった。望月の浮気が発覚したのだ。しかもいっぺんに三人も。
泣きながら色んな人に電話をかけた。バイト先の先輩の麦子さんに電話をかけると麦子さんは

「んー、でも望月くんて、そういう男って感じじゃん？」
と動じずに返事をした。
「そういう男って、どういうことですか」
「浮気するようなタイプってこと」
「かっこいいってことですか」
真面目に尋ねるあたしに、麦子さんは携帯の向こうで苦笑するような声を漏らすと
「いや確かに望月くんはかっこいいけどさ、別にかっこいい男が皆、浮気する訳じゃなくてさ」
と当時のあたしにはよく分からないことを言った。
「あたしには、分かりません」
「由真ちゃんは見る目無いな。まあでもそこが可愛くて男が寄ってくるんだろうけど」
「そんなことで可愛いなんて思われて、寄って来られるのは嫌です」
「だったら見る目、つけることだね」
「どうすれば、つくんですか」
「場数踏むことだね。望月くんの浮気も分かったことだし、別れて見る目つけるチャンスじゃん」
「あたしに新しく彼氏なんて、できると思いますか」
「そりゃできるでしょ。いい男と付き合えるかは、分かんないけど」
「いい男と、付き合いたいです」
「そのために、見る目つけるんでしょ」
麦は踏まれて強くなるのだから、お前も逆境により成長しろという願いを込めて「麦子」と命名されたのだと、以前あたしに語ってくれた麦子さんは、あたしへのアドバイスも何だかスパルタな感じで決して懇切丁寧なものではなかったけれど、だからこそあたしはその後自分の力で考えて色んなことを悟ることができた気がする。
たとえば相手の不実を少しでも嗅ぎ取った時には、面倒がらずにその場で相手の人となりを確認しておかなければ、後になって四股発覚などの大きなトラブルに見舞われる可能性があるとか、過去で

あろうと別の女の元から自分の所へやって来た男は、そういう性質なのだから、また別の女の所へ行ったとしても全く不思議は無いのだということとか。

だから望月の四股発覚とその後の別れは、あたしの彼女持ちの男への拒否反応を更に強める結果になった。それなのにその二年後にあたしは彼女持ちの男を好きになった。しかも今回は過去の女じゃない。現在進行形の彼女がいる男が相手だった。

どうしてそんなことになったのかは、まずは彼との出会いから説明する必要があると思う。事の発端は勤め先の損保会社の一年先輩である横内さんの何気ない一言だった。

「最近知り合ったばっかの男友達なんだけど、これが今まで生きてきた中で初めて見るぐらいのイケメンなのよ」

昼下がりの給湯室で、興奮気味に話しかけてきた横内さんの報告をあたしは心底羨ましいと思いながら聞いていた。その時あたしは望月の次の次に付き合った男と別れてから、三日と経っていなかったから。

面倒臭がり屋のあたしは、麦子さんに言われた「場数踏むことだね」というアドバイスを、馬鹿真面目に守るつもりはさらさらなかったのだけど、あたしの意に反して恋愛はどうも続かなかった。それなのに見る人にダーウィンの進化論を想起させずにはおかないメスゴリラそっくりの横内さんに、イケメンの男友達ができたなんて一体どういうことだろうと思った。

もちろんメスゴリラにだって繁殖する権利はあるけれど、でも彼女にはほんの一ヶ月前に彼氏ができたばかりだった。それなのにどうして、「今まで生きてきた中で初めて見るぐらいのイケメン」までもがメスゴリラと友達になったりするんだろうと思った。だってあたしには彼氏どころか男友達の一人もいなかったから。

それって種の保存の観点からいくと凄く不公平なことに思えた。だからあたしは

「えー、そこまでのイケメンならあたしも見てみたいですう」

とねだってみた。何せあたしは相手がイケメンだという理由だけで男に惚れることができるのだ。彼女の有無にチェックが厳しいだけあってそれ以外の項目に対してはあたしの条件はかなり緩い。

もっとも望月以降二人の男と別れているから、その二人の欠点に特徴がかぶるような男は駄目だけど、かぶらなければ多分問題が無い。望月の次の男とは遠距離恋愛に耐えられなくなって別れ、その次の男には名前を偽られていたことが発覚して別れた訳だから、要は近距離に住んでいて偽名じゃなければＯＫだ。

ということはフリーのイケメンと知り合いさえすれば、大抵の男なら大丈夫ということになる訳だけど、それが横内さんに「今まで生きてきた中で初めて見るぐらいのイケメン」と言わしめるくらいのイケメンなら、もう全くもって大丈夫だ。

彼氏ができたばかりで幸福の絶頂の横内さんは、偽名を使っていた男と別れたてホヤホヤの哀れなあたしのおねだりを快く引き受け、その素晴らしいイケメンに早速連絡を取ってくれた。するとイケメンは場所を自分のアパートと指定したばかりか、あたしと横内さんに夕飯を作るよう申し入れてきた。

初対面の女にメシを作れとは傲慢な男だと思ったけれど、材料費は向こう持ちだという話だったのであたしは二つ返事でＯＫした。それを断ったところで、あたしだってどうせ一人暮らしなのだから自炊をしなければならないのだ。

だったらどうせ料理をするなら、一人でやるより横内さんと一緒にやった方が楽だろうとあたしは思った。一人分の夕飯を一人で作るより、三人分の夕飯を二人がかりで作った方が効率が良いのは当然だ。加えて材料費どころか光熱費まで浮く訳だからあたしにとっては決して損な話ではなかった。

しかも類稀無きイケメンの観賞付きだ。たとえ付き合えなくても評判の高いイケメンの顔を一度拝んでおいてもバチは当たらない。

それでも普通はまずはどこかの居酒屋で会ったりして、そして費用を男が持つものじゃないかとも思ったけれど、でも「うちに来て

メシを作れ」と言われたことによって、むしろそんな高飛車な要望を出すその男が、一体どこまでイケメンなのかとあたしは興味がそそられた。

約束の日、会社帰りにあたしと横内さんはスーパーで買出しをするとイケメンのアパートへと向かった。その道すがら横内さんは突如

「由真ちゃんに、お願いがあるんだけど」

と言い出した。ゴリラ顔の人に突然真面目な顔をされると何だか余計にワイルドな感じがしてあたしの体を変な緊張感が走った。

「何ですか」

「若菜さんに、わたしに彼氏がいるってこと言わないで欲しいんだ」

若菜だなんてどっかの女の子の名前みたいだけど、それが会いに行く予定のイケメンの苗字だった。それっぽいといえばそれっぽい苗字だけどそんなことよりあたしは横内さんの申し出が気になり、

「どうしてですか」と尋ねた。

「わたし男友達に、彼氏がいるからとかって遠慮した付き合い方されるの嫌なの」

「はあ。分かりました」

実を言うとよく分からなかったのだけど、あたしはそう答えておいた。若菜さんとかいうイケメンとあたしが今後また会う保証は無い訳だから横内さんの真意は正直言ってどうでも良かった。要は横内さんに彼氏がいることを、今夜口にしなければ良いだけだとあたしは考えた。

リーリーと虫の声が響く閑静な住宅街の一隅に、イケメンのアパートはぽつんと建っていた。それは築三十年くらい経っていそうなあまり小綺麗とは言えない様子の建物だったけれど、その分部屋数は多く台所もたっぷりとしたスペースがあった。

そのアパートの部屋の中で、イケメンは何とジャージでくつろいでいた。初対面の女と会うのにジャージとは気合が入らないことこの上無い。

おろしたてのバルーンスカートをはいて、張り切ってやって来た自

分が何となく馬鹿みたいに思えた。ついでに料理の予定があるのにどういう訳か白いパンツスーツを身につけていた横内さんが、確実に馬鹿みたいに思えた。しかしイケメンは決して無愛想ではなかった。

チャイムを鳴らしたあたしたちを、イケメンはまるで昔からの女友達を迎えるかのようなフレンドリーな態度で迎えると、夕飯ができあがるまでの間、テレビと新聞を交互に眺めながらゆったりと待っていた。

夕飯を作る途中、居間でくつろぐイケメンの背中に

「お手洗い、お借りしていいですか」

と尋ねると、イケメンは

「おう、そこにあるぞ」

と気さくにトイレを指し示した。あたしは和式便器の上にしゃがみ込みながらイケメンの顔立ちを脳裏に浮かべ、あんまり好みじゃないなと思った。

確かにイケメンであることは間違い無いし、タレントになってもおかしくないくらいのレベルだったけど、でも彼の顔はどうにもこうにもバタ臭かった。

あたしは一目見ただけでは忘れてしまいそうな、印象に残らないあっさりしたイケメンが好みなのに、若菜さんは一口でお腹いっぱいになりそうな程、濃い顔立ちをしていた。彫りは深いし目はぱっちりしてるし何だかハーフみたいだった。あんな顔を毎日見ていたらさぞ胸が悪くなりそうだ。

けれど別に今後会う約束をした訳ではないのだから、今夜一晩くらいあの顔を見せられたからといって特に問題は無かった。たまにこってりした洋食を食べることに別段異存があるはずは無い。

そう思いながらトイレを出ると、居間では何故か横内さんが、エクステンションの巻き髪を振り乱しながらイケメンに蹴りを入れていた。

横内さんは顔はただのメスゴリラだけど、二十二歳という年齢と

エクステンションのおかげで時々綺麗なメスゴリラに見える。けれど動作が荒っぽいために、どうしても野性味が溢れてしまうのが難点だ。
特にこんな風に男に蹴りを入れたりしたら最悪だ。しっとりした美女がやってさえ興ざめなものを、メスゴリラがやってしとやかに見える訳が無い。
びっくりしたあたしは「どうしたんですか」と尋ねたが、興奮したメスゴリラ、もとい横内さんは何も言わず、イケメンはニヤニヤと笑っていた。
その後で横内さんがトイレに立ったので、イケメンに
「さっき、何があったんですか」
と尋ねると
「知らん。あいつの彼氏が俺の知り合いだからそれを聞いたら突然蹴られた」
と首を捻っていた。
「知り合いなんですか」
「おう、今日男の方に『実は付き合ってる』って聞かされてな。それでさっき聞いたら急に怒り出した」
「認めなかったってことですか」
「そうだな。でも付き合ってんだろ」
「さあ、あたしは知りません。相手の人見たことも無いし」
「じゃあ、男の方が嘘ついてるってことか」
「嘘つくような人なんですか」
「そんな奴じゃないけどな」
そのようなやり取りをしている内に、トイレから水が流れる音がしてきたので、あたしはさっさと台所に戻ると、そ知らぬ顔でカレールーを鍋に投げ込んだ。横内さんの提案により今夜のメニューはカレーとサラダということになっていた。
トイレから出て来た横内さんは先程の件には触れずに
「レタス、どこだっけ」

とか
「きゅうりは、普通の輪切りでいいよね」
などと専ら調理に関することばかりを口にしながら、あたしと共に台所で立ち働いた。
一体先程のイケメンへの暴挙は何だったのか、何故そこまでして彼氏の存在を隠したいのか、あたしにはさっぱり分からなかったけれど、元々特に横内さんと親しい訳でもないあたしは疑問はそのままに鍋の中をかき混ぜた。会社に勤め始めてすでに一年四ヶ月が経っていたけれど、横内さんと二人で出かけたのはその日が初めてのことだった。
食卓にカレーとサラダが並んだ頃には、横内さんとイケメンは表面上はすっかり仲直りしたかのように振舞っていた。あたしはとりあえず真相はどうでも良かったので、その雰囲気の中三人と歓談した。
隠し味も無ければ工夫も無い平凡なカレーとサラダを咀嚼しながら、あたしたちは当たり障りの無い世間話に花を咲かせた。イケメンは当たり障りの無い世間話が大変上手だったので、あたしは全く退屈せずに会話を楽しむことができた。
後で聞いたのだけれど、イケメンは住宅販売会社の優秀な営業マンで他社から引き抜きの話が持ち上がる程の腕前なんだそうだ。ということは、初対面の相手と当たり障りの無い世間話をするのが得意なのは至極当然なのだが、そうと知らないあたしは段々とこの人といると楽しいと感じ始めた。
そう感じ始めると不思議なもので、一口でお腹いっぱいだと思ったイケメンのバタ臭い顔立ちを、また近い内に是非拝みたくなってきた。会話が楽しければ顔立ちのタイプなど気にならなくなってくるから妙なものだ。好みではないとはいえイケメンであることには変わりがないのだから、いいじゃないかという気になってくる。
ただそうはいっても、あたしはこの時はまだイケメンを好きになる予定ではなかった。食器棚に収納されていたペアのマグカップや、

椰子の木が描かれた可愛らしい食器洗剤や、厚型テレビの上に鎮座しているテディーベアなど、この部屋には至る所に女の匂いがあった。

おそらくイケメンには特定の彼女がいるのだろう。そもそもイケメンの上に会話が上手い二十六歳の男が、フリーな訳が無いではないか。あたしはそう考えながらイケメンと語り笑った。イケメンも笑いながらあたしに連絡先を尋ねた。籠バッグの中を探ったが携帯はそこに無かった。どうやら会社に忘れたらしい。

イケメンは連絡先をメモした紙を渡してくれたので、あたしはそれを籠バッグにしまった。彼女付きの男の連絡先など貰っても仕方が無い気がしたが、しかし友達付き合いをする分には構わない気がした。

現に横内さんだってイケメンと友達付き合いをしているのだ。だったらあたしだって、イケメンの男友達を一人くらい持っても構わないだろうと思った。

アパートからの帰り道、横内さんに「どうだった？」と聞かれたあたしは

「確かにイケメンですね。好みど真ん中じゃないけど感じのいい人だなと思いました」

と感想を述べた。すると横内さんは「付き合ってみたい？」と唐突な質問をした。

だがその質問の唐突さは、あたしにリアリティーのある空想を芽生えさせた。あのイケメンと自分が付き合う図が脳裏にくっきりと浮かび上がりあたしはその事実に感嘆した。好みど真ん中ではない男とただ一度出会っただけで、ここまではっきり相手と付き合うことを考えたのは初めてだった。

ただその空想は、横内さんの質問により誘導されたものだったのだけど、偽名を使っていた男と別れたばかりの傷心のあたしは、しばしその空想に酔いしれ

「いいですねえ。若菜さんと付き合ったら人生変わりそう」

とうっとりとつぶやいた。
会ったばかりだというのに、あのイケメンには何故か、この人に人生を託しても大丈夫と思わせるものを持っていた。
住宅というものは普通人生で最大の買物だから、アカの他人にそこまで信頼させる術が無ければ契約は成り立たないのだろう。あたしは別にイケメンから住宅を購入する予定も資金も無かったが、無かったからこそ、人生自体を託したくなってしまったのかも知れない。
だがひとしきり盛り上がった後、あたしは
「でも若菜さんて、彼女いますよね」
と冷静に尋ねた。横内さんは一重の小さな目を見開くと
「え、そんなこと言ってた？」
と驚いた声を出した。
男友達だと言っていたのに、この人は友達の彼女の有無も知らないんだろうかと思いながら、あたしはペアのマグカップや椰子の木の食器洗剤やテディーベアについて口にした。
「うーん、由真ちゃんよく見てるねえ」
横内さんは感心したように唸ったが、言われたあたしは妙な心地だった。
二年前に望月の四股が発覚した時には、麦子さんには「見る目無い」と言われ他の友人たちにも
「十ヶ月も付き合ってて、どうして気付かなかったの」
と呆れられたというのに、今では年上の女にこうして観察眼を感心されている。
自分は見る目がついたのだろうか。これからはいい男と付き合えるのだろうか。せっかく知り合ったイケメンは彼女持ちだったがとりあえず見る目がついたならまたチャンスが来るのだろうか。
そんなことをぼんやりと考えていると横内さんが
「じゃあ彼女がいるかどうか、わたしが聞いてあげる」
と言い出した。連絡先は貰ってあるのだから別に横内さんに聞い

てもらう必要は無い気がしたが、せっかくそう言ってくれるなら断るのも悪いと思いあたしは「お願いします」と答えた。
ただその時何となく引っかかるものを感じたのは確かだった。横内さんがあたしの為にイケメンの彼女の有無を探ろうとしているということが、あたしには何やら不自然に感じられた。友達の恋人の有無というものは、普通は誰かの為ではなく自分の好奇心の為に確認するものじゃないだろうか。
そんなことを漠然と考えたが、しかしあたしは気にしないことにした。そもそも男友達に彼氏の存在を隠したり、存在を察知されたからといって蹴りを入れたりする横内さんなど、あたしにとっては最初から理解不能の相手だった。そんな相手に更に理解不能な点があったからといってそんなことは当たり前の話だと思った。
横内さんと別れ自宅アパートに向かう道すがら、あたしはもう一度イケメンのことを考えた。あたしたちがアパートにいた間中、イケメンは決して馴れ馴れしくもなければ冷淡でもなく、万事に渡って丁度良かった。あそこまで丁度良い対応ができる人間はそうざらにはいない。
あれは絶対彼女がいるなとあたしは確信した。どれだけモテる男であっても、フリーの男というものは初対面の女に対してもう少しガツガツしているものだ。どんなに隠そうとしてもその飢えた様子は雰囲気として現れる。だがイケメンはあのアパートであまりにも悠然としていた。
だがそんなことはあたしにとって何の問題も無かった。明日以降携帯にお礼メールでも入れてみて、それでもし友達になってくれそうならなれば良いし、なってくれなさそうならならなければ良いだけの話だった。
好意は持ったものの、あたし自身イケメンに対し特に入れ込んだ訳ではなかった。彼女持ちの男に惚れるなど馬鹿な女がすることだった。その時はまだそう思っていた。
翌日出社すると横内さんは早速あたしの席にやって来て

「若菜さん、彼女いないって」
と嬉しそうに報告してきた。マグカップも台所洗剤もテディーベアも全て一ヶ月前に別れた彼女の痕跡だということだった。
あたしはその話を簡単に信じた。あたし自身別れたからといって前の男のゆかりの品々をわざわざ捨てたりするのは面倒臭いと思う性分なので、彼女の残骸が残る部屋を不審には思わなかった。
とはいえイケメンが、まだ別れてから一ヶ月しか経っていないことは気がかりだったけれど、前の男と別れて一週間と経っていないあたしに文句を言う資格など無かった。
イケメンの悠然とした雰囲気も、横内さんの次のセリフにより納得がいった。横内さんは実にご機嫌な様子で
「若菜さんが由真ちゃんのこと、『すごくいい子だ』って気に入ってて。『友達に凄くいい奴がいるから是非紹介したい』って『きっと由真ちゃんに合うはずだ』って言うの。どうする？」
とあたしの顔を覗き込んだ。
そんなことを言われては失望しない訳にはいかなかった。彼女のいない身であたしをすごくいい子だと思ったなら、友達に紹介する前に自分が付き合えば良いではないかと思った。つまりイケメンはあたしに対し食指が動かなかったからこそ、ああまで悠然と構えていたということかとあたしは考えた。
だがそうはいっても、あたしの中には微妙な引っかかりが生まれていた。そもそもあたしはあの初対面でそこまで絶賛される程良い振る舞いをした覚えが無かった。
けれどあそこまで感じの良いイケメンに、「すごくいい子」と褒めそやされたという事実はあたしの自尊心をくすぐった。またあのイケメンが「きっと由真ちゃんに合う」と一押しする「すごくいい奴」にも、興味が湧いた。
あたしはそれまでに友人から男を紹介された経験はあったが、きっとあなたに合うからというお墨付きの紹介を受けた経験は無かった。望月以降、自他共に認める見る目の無い女であるあたしは、だ

ったらいっそ他人の見る目を試してみるのも悪くない気がした。
それも自分の人生を託したくなる程の信頼感を抱かせるイケメンのお勧め物件なら、見るだけ見ても良い気がした。腕利きの営業社員に
「お客様に、ぴったりの商品がございます」
と言われた時に感じるときめきと似た感情にあたしは駆られた。
そんな前向きな思いを述べると、横内さんはその日の昼休みの内に早速イケメンと連絡を取り日時を決めた。あたしは帰宅後に
「昨夜はお邪魔しました。明後日の件、横内さんに聞きました。楽しみにしてます」
という文章を作成すると、携帯番号を添えてイケメンに教わったアドレスに送信した。
イケメンからは一時間後に
「仕事が立て込んでて遅くなって悪いな。明後日は遅れないから心配しないでくれ」
と返信が来た。またしても馴れ馴れしくもなければ冷たくもない丁度良い距離感のメールだと思った。
こんな人が突然、是非友達を紹介したいといったやり方で間を詰めてきたことをどう捉えれば良いのかよく分からなかったが、いずれ二日後に会えるのだと思うとあたしはあまり気にならなかった。
けれど二日後、指定された居酒屋にイケメンと共に現れた青島を見てあたしは落胆した。青島は「類は友を呼ぶ」という諺に敵意でもあるのだろうかと勘繰りたくなるくらいの、平凡な容姿の男だった。
だが青島は酷く顔色の悪い男だった為、「名は体を表す」という諺だけは守ろうとしているかに思えた。その為あたしは心の中で青島を青びょうたんと呼ぶことにした。そう決めてしまうとあたしは覚え易い苗字を持った彼に少し好意めいたものを感じた。
考えてみればイケメンは、青びょうたんのことを「すごくいい奴」と言った訳であって、決して「外見のいい奴」と評した訳ではない

のだから、「是非紹介したい」と言われた身としては一応青びょうたんの内面を探る義務がある気がした。
あたしは隣に座った青びょうたんに料理を取り分けてやりながら何の仕事をしているのかと尋ねた。青びょうたんは半年前から板前のバイトをしていると答えた。二十六歳にして板前のバイトを始めて半年とはこれいかに。追及すると青びょうたんは接客がストレスになり美容師を辞めたのだと答えた。
あんまり気が合いそうにないなと思った。あたしは高校時代から果物売り場の売り子やら中元コーナーの注文受けなど、幾つか客商売のバイトを体験し、短大時代に望月と知り合った家庭教師派遣センターではたまに家庭教師の代打を務め、損保会社に就職後も、事務員とはいえ来客の応対やら電話応対やらと客と関わる仕事をしてきたが、客をストレスだと感じたことはあまり無かった。
もちろん目の前で堂々と万引きをされたり、電話を取った途端に「女じゃ話にならん。男を出せ」
と喚かれたりなどと嫌な思いもしてきたが、しかし客がストレスだという感覚があたしにはよく分からなかった。毎日顔を突き合わせる社内の人間の方があたしにとっては余程ストレスだった。
それなのにファッション誌でも与えてやり過ごせば、何とかなりそうなヘアサロンの客をストレスに感じ、あろうことか畑違いの板前の世界に飛び込んだ青びょうたんを、あたしはどう理解して良いのか分からなかった。美容師と板前の共通点といえばあたしには刃物を扱う仕事としか思い当たる節が無かった。
だがイケメンのお墨付きである青びょうたんが、そんな危険人物であるはずが無かった。あたしは青びょうたんを理解しようと努め、とりあえず
「美容師さんだったんだ。お洒落な感じですね」
とお世辞を言った。
実のところ青びょうたんの髪型は、一回千円の床屋で仕上げたのではないかと訝りたくなる程の、何の変哲も無いただの短髪である

上に、カラーリングの一つも施されていなかったから、あたしはこれが本当に元美容師なのだろうかとの不審を覚えていたのだが、しかし現在の職業を考えれば、それは仕方の無いことかも知れなかった。

だが髪型に凝れないのなら、服装で元美容師の気概を見せるという手段もある筈だが、その夜の青びょうたんの装いは無地のTシャツの上にチェックの襟付きのシャツをはおり、ジーンズを合わせただけという甚だ平凡な装いで、仕事帰りのスーツ姿で現れたイケメンの方が余程見栄えがしていた。

だがあたしのお世辞でいい気になった青びょうたんは、早速図に乗って、美容専門学校時代のヘアカットのテストでは素早い時間で結果を出しただの、シャンプーが上手いからと客からチップを貰ったことがあるだのとどうでも良い自慢話を始めた。

そんなに技術面で優れていたなら美容師を辞めねば良いものを、それでも辞める程ストレスを溜めたということは、この人は人間が嫌いなんじゃないだろうかという気がした。そうすると隣に座っているあたしのことも、密かにストレスだと思われているような気がしてきてあたしは酷く憂鬱になった。

一方対面に座ったイケメンは、今日も相変わらず丁度良い話振りで終始場を和ませていた。あたしは青びょうたんと比較しながら、改めてこのイケメンは何て素敵なんだろうと思った。

外見もさることながら住宅営業の敏腕イケメンと、客ストレスにより二十六にしてフリーターの青びょうたんでは、会話面でもイケメンに軍配が上がってしまうのは当然だった。こんなどうでも良い青びょうたんを、なぜイケメンが「きっと由真ちゃんに合う」などと称したのか全くもって不思議だった。

おそらくイケメンは、何か勘違いをしたのだろうとあたしは考えた。そもそも一度しか会っていないあたしに合う人間など他人に分かるはずが無いではないか。ということはあたしを「すごくいい子」と感じたこともイケメンの勘違いだった可能性もあるが、しかしあ

たしは気にしなかった。
イケメンがあたしのことを勘違いしたのなら、時間をかけて訂正できる可能性がある。ということはイケメンがあたしに恋愛感情を抱く可能性もあるではないか。だとしたらいっそダメモトでイケメンにアプローチしてみてはどうだろうか。
　青びょうたんのどうでもいい自慢話に適当に相槌を打ちながら、あたしはこの思いつきに夢中になった。実はあたしは元来の面倒臭がり根性から自分から男に近づいた経験が無く、その事実を少し気にしていた。
　多分男に粉をかけるなどということは、歳を取れば取る程億劫になるはずなのだ。だとしたらまだ二十一歳である今の内にやって麦子さんの言うところの場数を踏んでおいた方がいい。そして相手はできるだけモテそうなタイプがいい。モテそうなタイプなら振られて元々なのだからショックが少ないではないか。
　そう考えると今目の前にいるイケメン程、その条件を満たしている男は見当たらなかった。彼女がいない上にイケメンで住まいもあたしの家からバスで二十分程度の上に、偽名でないことは表札で確認済みだ。
　あたしがすっかりやる気を出していると、何を思ったか青びょうたんが連絡先を尋ねてきた。あたしが携帯を忘れたと嘘をつくとイケメンが
「由真は、携帯を忘れてばっかだな」
　と白い歯を見せて笑った。
「由真」と呼び捨てにされたことであたしは有頂天になった。この間まで付き合っていた彼氏は、自分が偽名を使っていたせいかあたしのことを一度も名前で呼ばなかったので、好意を持った男に名前を呼ばれたのは久し振りの出来事だった。
「真の自由」との意味合いでつけられた自分の名前を、あまりにも抽象的過ぎることから持て余していたあたしだったが、この時あたしは由真という名前は何て素晴らしいんだろうと思った。この名前

を持つ者として真に自由に生きたいと思った。目の前のイケメンを好きだと思うその気持ちに従って真に自由に生きたいと思った。
男二人と別れた後で横内さんにその思いを告げると、横内さんは
「青島さん、いい人そうなのに」
とバナナを取られて残念がっているメスゴリラのような顔をしたが、あたしには具体的にどこら辺がいい人そうなのかよく分からなかった。
でもそれを尋ねたいとも思わなかったのであたしは
「でもやっぱりあたしは、若菜さんがいいんです」
とだけ告げて横内さんと別れた。
けれどその飲み会後あたしは何の行動も起こさなかった。イケメンにプッシュしてみようと決めたとはいえ、元来の面倒臭がり根性はそうそう変わるものではない。のん気なあたしはとりあえず一週間程ほったらかして、もし向こうから何の連絡も無ければメールでも入れてみようと考えていた。
だが一週間も待つ必要は無かった。飲み会から二日たった夜イケメンから電話がかかってきたのだ。イケメンはあたしの自宅の近所の居酒屋で青びょうたんと共に飲んでいると告げた後、「お酌をしに来い」とあたしに命じた。
ホステス代わりに使うつもりだろうかと思ったが、別に不快な気分にはならなかった。会社の飲み会だって付き合いで仕方なく出席しているというのに、当然のようにお酌やら何やらをさせられている身だ。だとしたら好きな男の為にホステスになるくらいどうということはなかった。
あたしは自転車に乗って教えられた居酒屋へ向かった。夏の終わりのことで夜風が甘く心地好かった。指定された居酒屋へはものの三分もかからずに到着した。
その居酒屋は、一目で個人経営と分かるあまり上等でない店構えで、店の周辺にはダンボールやら空き瓶やらがゴチャゴチャと散乱していた。こういった店に一人で入った経験の無いあたしは横開き

のドアに恐る恐る手をかけた。
　扉を開けると、瞬時にムッとした熱気と共に騒がしい客の喧騒に包み込まれた。しけた店構えとは裏腹に案外繁盛している店のようだと思いながら店内を見渡すと、片隅のテーブルで、イケメンと青びょうたんが差し向かいでジョッキに入ったビールを飲んでいる様子が見えた。
「お酌をしに来い」と呼び出したのは口実で、イケメンはただ単にあたしを呼び出したかっただけのようだ。そう考えながらテーブルに近づくとイケメンは青びょうたんの隣に座るよう促した。どうやらイケメンは、自分の為ではなく青びょうたんの為にあたしを呼び出したらしい。
　あたしはがっかりしながら席に着くと、「横内さんは？」と尋ねた。あたしはてっきり横内さんもこの場に呼ばれたものと思い込んでいた。
「別に横内は、呼ばなくてもいいだろ」
「ふうん。あたし若菜さんてもっと横内さんと仲いいんだと思ってたんだけど」
「そんなに仲良くもねえけどな。三回しか会ったことねえし」
「えっ、じゃあ若菜さんち行った時が二度目だったの？」
「そうだな」
　そのどうでも良さそうなイケメンの返答にあたしは仰天した。ということは横内さんは、たった一度しか会っていない男のことを、「男友達」と言っていたのだろうか。彼女にとっては連絡先さえ交換すれば、その相手は「友達」というカテゴリーになってしまうのだろうか。
　あたしはますます横内さんのことが分からなくなったが、しかしその事実はあたしの気を良くした。少なくともあたしは横内さんよりはイケメンに気に入られているということだ。
　機嫌を良くしたあたしは、再度連絡先を尋ねてきた青びょうたんと連絡先を交換した。携帯を忘れたという手は二度は使えない訳だ

し、それに青びょうたんがこれ程イケメンと頻繁につるんでいるのならあまり青びょうたんに冷たくする訳にはいかなかった。
その夜は三人で飲みながらまた当たり障りの無い世間話をし、そして別れた。その三日後もやはりイケメンに同じ居酒屋に呼び出され、三人で当たり障りの無い世間話をして別れた。
毎回青びょうたんが出席することが邪魔ではあったが、しかしイケメンと飲めることがあたしは嬉しかった。こうして複数で会っている内にイケメンがあたしを少しでも気に入ってくれればいい。そうあたしは願っていた。
だがその二日後あたしの携帯を鳴らしたのは、イケメンではなく青びょうたんだった。「飲みに行こう」と誘う青びょうたんに対しあたしは「若菜さんも来るの？」と尋ねた。イケメンが来ないのならあたしは行くつもりは無かった。
だがそこで突然携帯から聞き覚えの無い男の声が流れて来た。男は「若菜は来ないけど、俺が来るよ」
とちゃらけた声を出した。
「もしもし、誰？」
「うわ、すげえ可愛い声」
男が興奮した声を出すと、背後で
「顔は、もっと可愛いよ」
という青びょうたんの声が響いた。そして「マジ？」という男の声にかぶせるようにして再び携帯から青びょうたんの声が
「もしもし、ごめん。電話奪われちゃって」
と流れた。
「ちょっと変なこと言わないで。そんな先入観持たれたらあたし行けないよ」
「だーいじょぶだって。ねえ友達に由真ちゃんの話したら会いたがってんだよ。ちょっとだけ来ない？」
「変な先入観持った人に会って、ガッカリされるのやだ」
「する訳無いじゃん。由真ちゃん可愛いんだから。つーか百歩譲っ

てがっかりされたとしてもさ。俺はガッカリしないし」
　これは遠回しな好意の告白だと思った。何とも思っていない青びょうたん相手でもこう言われてしまっては悪い気はしなかった。むしろハッキリと好きだと言われなかった気楽さが心地好く思えた。
　加えてあたしに会いたがっているという青びょうたんの友達への好奇心があたしの心をうずかせた。もしかしたらその友達は結構いい男かも知れないではないか。だったらあたしと決して二人きりで会おうとしないイケメンに焦がれるよりも、その男との未来を考えた方が賢明かも知れない。
　そう考えたあたしは、車でアパートまで迎えに行くという青びょうたんの申し出を受けてアパートの駐車場まで出て行った。その時ふとこれが本来の女の扱われ方だよなという気がした。初対面で夕飯を作れとか近所にいるからお酌をしに来いとか、そんな横暴なやり方を取るイケメンが何だか恨めしく思えてきた。
　だがスカイラインに乗って現れた青びょうたんの後列シートに座っていた友人を見て、あたしは全身の毛穴が開きそうになった。
　こんなことを言っては失礼かも知れないが、彼は元オウム真理教の浅原にそっくりだった。年齢は青びょうたんと同じ二十六だから本物よりは若く見えるが、しかし年齢以外の点では本人とどこが違うのかあたしにはさっぱり分からなかった。
　浅原はあたしの顔を見るなり
「ホントだ、可愛いじゃん」
　と叫んだが、浅原にそんな言葉使いで容姿を褒められてもどうしていいか分からずあたしは曖昧に微笑んだ。
　車の中で浅原は、自分のただごとではない見てくれになど一向に頓着しない様子でひたすら喋りまくっていたが、居酒屋に着きビールをあおると、更に舌が滑らかになった様子でどんどん下ネタに走り始めた。あたしが浅原が口にする「媚薬」が何のことか分からず聞き返すと浅原はあたしのことを世間知らずだと馬鹿にした。
　あたしはそれまで媚薬とは、シェイクスピアの「真夏の夜の夢」

で、悪戯好きな妖精パックが使ったような架空の惚れ薬のことだと思っていたのだけれど、どうやら媚薬とは性欲を増進させる薬として現実世界に出回っているらしかった。

でもそれを知らないくらいで、なぜ世間知らず呼ばわりされねばならないのかと頭にきたが、しかし媚薬を処女に用いたという浅原の知人の体験談があまりにも刺激的で、あたしは腹を立てている暇が無かった。しかし刺激的とはいえそんな話を面白おかしく話す浅原に感心はできなかった。

毒々しい外見で毒々しい話を語る浅原を見ていると、隣に座る平凡な青びょうたんが、中庸の美徳を持った男に思えてくるから不思議だった。たとえば板前の身でありながら、ヘビースモーカーである青びょうたんの矛盾なども、浅原の毒々しさに比べたら大した問題ではないどころか、むしろ非常に人間らしい魅力のような気がしてきた。

その二日後に青びょうたんに携帯を鳴らされたあたしは、今度は二つ返事で誘いに応じた。スカイラインの後列シートにはまたもや浅原が乗っており、居酒屋ではまたもや浅原によって下世話な話が繰り広げられ、あたしはまたもや世間知らずだと罵られたが、しかしその空間の居心地は決して悪くなかった。

安全な場所で、他人のスリリングな話題を肴に酒を飲むのは悪いものではなかった。加えて飲み代は男持ちだったしその場所に平凡で自分に好意を持った男がいるという安心感があった。

毒々しい浅原を前にすると、自分が平凡な青びょうたんとセットになることに何の抵抗も感じなかった。俗悪な観賞物を軽蔑しながらもその俗悪さを眺める観客のような気分で、あたしは浅原を観賞した。隣に座る青びょうたんは自分と同じ観客のように思えた。

翌日の会社の昼休みに、あたしは目の前の席で弁当をつつく横内さんに

「何だかんだ言いましたけど、あたし最近青島さんと出かけてるんです」

と打ち明けた。
横内さんは弁当から顔を上げると
「それがいいよ。若菜さんなんて性格悪いもん」
とゴリラのような顔をひそめて見せた。
「そうなんですか」
「わたしとの電話中もさ、人の話ネットしながら聞いてんの。最低でしょ」
その時その話を隣で聞いていた先輩社員が
「え、若菜さんて人、自分から電話かけときながらそんな態度なの？」
と割り込んだ。すると横内さんは
「いえ、かけたのはわたしの方ですけど」
と答えたので先輩社員は黙りあたしも言葉を返さなかった。それはただ単に、横内さんが嫌われているだけだろうという空気が流れたが横内さんはそれを察していないようだった。
だがどちらにしろ、嫌いな女からの電話をネットをしながら応対するイケメンのやり口はあたしには好ましいものではなかった。出たくない電話なら出ねば良いものを、出るだけ出てそのような態度を取るとはあまりにも曖昧過ぎる。だから察しの悪い横内さんがこのようなことを言ったりするのだ。
あたしが電話をかけても、イケメンはそのような態度に出るかも知れないとあたしはふと不安に陥った。そんな曖昧な対応をする男に接触を試みるのは何やら気が進まなかった。
それくらいなら自分に好意を持っていると分かっている男に、受身の姿勢で臨んだ方が気楽だった。あたしはすっかりイケメンにチャレンジするという当初の気概を失った。
だがそんな折、またもや青びょうたんに呼び出され出かけて行くと店には少し遅れてイケメンがやって来た。久し振りにイケメンの姿を目にするとあたしの胸はどうしようもなく高鳴った。やはりあたしはどうしてもこの人でなければ駄目なのだと思った。

イケメンが現れると、不思議なことに浅原でさえ毒気を抜かれたようになっていた。あたしは久し振りに当たり障りの無い酒の席での会話を楽しんだ。イケメンも下ネタは嫌いな方ではないようで時折きわどいセリフなども口にしたが、しかし浅原主導の会話と比べると雰囲気は明朗で健全だった。

浅原に慣らされたせいか、イケメンのきわどいセリフをあたしが笑いながら受け流すとイケメンは機嫌の良い顔をした。どうやらイケメンは頭の回転の早い女が好きなようだった。あたしが気を良くしていると、イケメンはトイレに立ちながらあたしの頭をぽんぽんと撫でた。

その行為にあたしは幸福の絶頂を覚え、酒の酔いも絡まってどうしようもなくときめいた。隣に漂う青びょうたんの硬い視線などどうでも良かった。青びょうたんなどあたしにはどうでも良かった。

だがイケメンがトイレから戻った時、青びょうたんが何気なさそうに

「そういや井内デンタルクリニックだっけ？りっちゃんが今勤めてるとこ」

とイケメンに話を振った。イケメンは平静な様子で「ああ」と答えた。

「この前通りかかったけど、結構繁盛してるっぽいじゃん」

「そうだな。忙しそうだな」

初めて耳にしたラ行の愛称で呼ばれる人間の話題に、あたしが思わず青びょうたんを見詰めると、青びょうたんは

「ああ、ワカちゃんの彼女」

とあたしに説明した。あたしは頭をガツンと殴られたようなショックを受けたが

「若菜さん、彼女いたの？」

と努めて冷静にイケメンに尋ねた。けれど内心では話が違うと叫び出しそうな自分がいた。

「おう、言わなかったか」

「横内さんが、いないって」
「ああ横内にはな。あいつも彼氏いないって言ってたからな」
そういうことだったのかとあたしは合点した。彼女がいるのではないかとの当初のあたしの予想は当たっていたのだ。だが横内さんがバレバレなのにも構わず彼氏がいない振りをした為、イケメンも自分だけ本当のことを言うのが癪に障り「いない」と答えたのだ。それを横内さんがあたしに告げあたしがそれを真に受けたのだ。
そう考えると、イケメンが青びょうたんをあたしに紹介したのも納得できた。自分にはすでに彼女がいるのだからちょっとくらいあたしを気に入ったからといって手を出しては人の道に反する。だとしたら気に入りの女は自分の友人に紹介して、程々の距離の所に留めたいと願うのは一つの人情だろう。
そう推測したあたしはイケメンのことは諦めようと考えた。彼女のいる男など好きになっても仕方がないのだから、諦めるしかなかった。
その後青びょうたんにあたしは何度か呼び出された。青びょうたんはごくたまにあたしと二人きりになりたがったが、大抵は複数で飲みに行きたがり、そして三度に一度くらいのペースでイケメンが合流した。諦めようと思ったのにあたしはイケメンに会う度に切ない気持ちになった。
こういう風にして、彼女のいる男に惚れてしまう場合もあるのだなとあたしは漠然と思った。最初から分かっていればセーブできたかも知れないが途中から心を切り替えることは案外難しかった。
顔を見たこともない、りっちゃんという歯医者勤めの女の存在よりも、自分の恋愛感情の方があたしにとっては余程リアリティーがあり、ただ一度聞かされただけではあたしの心に何のストッパーにもならなかった。
けれどあたしはまだ自分の感情を甘く見ていた。今更とはいえ彼女がいることが分かった以上は、自分の感情はその内冷めるはずだと高を括りあたしはしばらく自分の感情を放置していた。するとあ

たしの感情はのっぴきならない程成長してしまい、イケメンが恋しくて恋しくてどうしようもなくなった。
「ワカちゃんは、世界は自分を中心に回ってると思ってるんだよな」
と青びょうたんがイケメンをからかい、それを受けてイケメンが生真面目に
「おう、世界は俺を中心に回ってるぞ」
と答えれば、何てポジティブな思考なんだろう。これぞコペルニクス的転回だととんちんかんに感動し
「ワカちゃんは、知り合った相手に必ず住所を聞くよね」
と浅原が言えば、そういえばあたしも初対面で住所を聞かれ、近所の本屋が遅くまで盛っていることなどについて語り合ったものだと感慨にふけったりした。
だが惚れたところであたしの心は辛くなるばかりだった。ならば会うのを止めれば良い。青びょうたんの誘いを断ることによってこの人間関係を絶ってしまえば良い。
そんな発想はあたしには浮かばなかった。無料で飲み食いできる上に刺激的な話題に触れられ、三度に一度は恋しいイケメンに出会えるこの環境をあたしは捨てる気になれなかった。
その頃会社に一つの花束が届いた。それはその日誕生日を迎えた横内さんに宛てられたものだった。贈り主は横内さんがイケメンに対し存在を隠そうとした例の彼氏だった。
これまでに好きな男から花を贈られたことのなかったあたしは、その出来事に大いに感動してときめいた。他人に贈られた花束で贈られた本人以上にときめくなど愚の骨頂にも思えるが、しかし作り物の恋愛ドラマを、冷めた心で演じる俳優を見てときめく視聴者は世に大勢いるのだから、あたしのこの心の動きは別段特殊なものとは思えない。
けれど横内さんに贈られた花束に感激しているあたしに、先輩社員たちは呆れ果て
「あのさあ、どうして彼氏が会社に送ってきたか分かってる？」

と冷ややかに尋ねた。
「びっくりさせる為じゃないんですか」
「ただ単にびっくりさせる為だけだったら、別に自宅でいいじゃないの。あれはヨコちゃんが彼に会社に送るよう言ったのよ」
「どうしてですか」
「由真ちゃんみたいに羨ましがる子がいるからよ。羨ましがらせたいのよ。ヨコちゃんてそういう人でしょ」
あたしが呆気に取られていると他の先輩社員が
「そうだよ。大体会社になんて送られたら持って帰るの大変じゃん。ヨコちゃんは実家から通ってるんだから昼間おうちに送ってもらって家族に受け取ってもらった方が楽じゃん。それなのに会社に送ってきたってことはヨコちゃんが彼に頼んだんだよ」
と加勢した。
その時あたしはふと、最近横内さんが彼氏のノロケ話をすることが増えたことを思い起こした。付き合い始めにノロケるなら分かるが、その頃には特に話題に出すことも無かったというのに、今頃になって、彼がいかに自分を愛しているかを誇らしげに語る横内さんを妙に思った。
だがあたしは本当はその時分かっていたのかも知れなかった。少なくとも横内さんのその様子や送られた花束から、あたしは一つの暗示を受けたのかも知れなかった。そう今にして思えば。
その夜青びょうたんから、東京土産を渡したいと電話がかかってきた。今日は勤め先の料亭が定休日だった為に一人で東京に買物に行ったのだということだった。東京は電車で片道二時間の距離だから日帰りをしたらしい。
電話を切りアパートの駐車場へ降りて行くと、今夜の青びょうたんは一人でスカイラインの運転席に座っていた。青びょうたんはあたしに助手席に乗るよう促すと
「ちょっと、公園にでも行こう」
とあたしを誘った。

近所のスポーツ公園の駐車場に着くまで、青びょうたんは東京での話をしていたが、その声は酷くかすれていた。あたしが理由を尋ねると
「昨日ワカちゃんに、風邪うつされちゃったみたいでさ」
と言った後、派手なくしゃみをした。
「だったら早く帰って寝た方がいいんじゃないの？お土産なんて別にまた今度でも…」
「でも、食いモンだから」
「だったら何で、公園にまで…」
あたしが言いかけたと同時に、スカイラインは公園の第二駐車場に停車した。辺りはぽつぽつと数台の車が駐車しているのみで人影は無かった。青びょうたんはあたしの言葉を途中でさえぎると
「だってしょうがないじゃん。好きなんだから」
とつぶやいた。
エンジンの切られた車内で、あたしは思わず青びょうたんの顔を見詰めた。漂う闇が青びょうたんの扁平な顔立ちに陰影を与えあたしはこんなに格好いい人だっただろうかと考えた。イケメンの持っていた風邪のウイルスに感染し瞳を潤ませる青びょうたんが、何やらとても好ましい男に思えた。
あたしはなぜかその場にいるリアリティーを失った。その時あたしの唇が「あたしも」とつぶやいた。あたしはそのつぶやきをまるで第三者のような気分で聞いた。
「付き合ってくれる？」と尋ねる青びょうたんに、あたしがうなずいたので、青びょうたんは助手席に手を伸ばしあたしの体を抱きしめた。青びょうたんの体は驚く程に筋肉が無く代わりに薄い脂肪が全体を覆っていた為あまりにも柔らかく、あたしはまるで母親に抱かれているような甘い気分になった。
けれどあたしを抱きとめる指の節々と耳元に感じる吐息は、間違いなく男のそれだった。この世にこんなにもふわふわと心地好くあたしを抱きとめる男がいるなんてとあたしは驚嘆した。

その時青びょうたんが、「うつっちゃうな」と体を離そうとしたのであたしは「いいの」と答えた。
「うつして」
そう要求するあたしの唇は、青びょうたんの唇によってふさがれた。青びょうたんの唇と舌はとろけるように柔らかくあたしはこれまでにこんな官能的なキスを味わったことが無いと思った。頭の芯がぐにゃぐにゃになってこのまま溶けてしまいそうだった。
その時あたしは、自分の下半身がすでに溶け出しているのを感じ愕然とした。これは何かの間違いだと思った。
あたしはこれまでに、初めてキスをした相手に対し欲情した経験が無かった。それが一途に好きだった訳でもない青びょうたんに対し、突然ここまで自分の肉体がだらしなく溶解してしまうとは信じられなかった。
けれど青びょうたんはそれ以上の行為に進もうとはせず、しばらくキスと抱擁を繰り返した後、あたしをアパートに送り届け東京土産のスイートポテトを渡して帰って行った。
あたしは惚けたような足取りで自分の部屋にたどり着くと、スカートをまくり上げショーツをぐいと下ろした。ショーツには透明な粘液が多量に付着しておりあたしは羞恥を覚えた。男の側がその先に進む気を持っていなかったにも関わらず、こうも過剰に反応した自分の肉体がとてつもなくいやらしいものに思えた。
けれど同時にあたしは安堵も手に入れていた。この体がこんなにもいやらしく先走った反応を起こしたということは、自分が青びょうたんに恋をしていた証だと思った。あたしはそれまでにここまであからさまな証を自分の体に感じた経験が無かった。
翌日風邪をひいたあたしは会社に病欠の連絡を入れると、一日中寝床でまどろんで過ごした。体と心がだるく熱く不快でそして幸福だった。あたしは重い体を起こし汗で張り付いたパジャマを着替えた。風邪と恋は似ていると思った。
まず兆候を感じる。即座に手を打てばやり過ごせるが甘く見て放

置すると確実に症状が現れる。そして発熱。物憂さ。体の痛み。判断力の低下。その症状のみに心が奪われる。客観性を欠き主観の虜になる。体から体液が止めど無く溢れる。そして……、風邪は万病の元だ。

夜になって、バイトを終えた青びょうたんから電話がかかってきたので、あたしは風邪をひいたと伝えた。青びょうたんが見舞いに来るというので、あたしはドレッサーに向かいスッピンに見える程度に薄く化粧をした。

昨夜まで、付き合うことになるなど夢にも思っていなかった相手に、今宵ノーメイクに限りなく近い顔を見せねばならないことがたまらなく恥ずかしかった。そのくせ見舞いに来られることを見越してシャワーはとっくに済ませてあった。熱く火照る心と裏腹に湯冷めでもしたのか体は冷えていた。

部屋のドアを開けた青びょうたんは、「大丈夫？」と尋ねながらコンビニの袋を差し出した。中身はレトルトのお粥だった。バイトとはいえ板前なのに、手製の料理を作ってくれないのかとあたしは落胆した。その時あたしは昨夜青びょうたんに渡されたスイートポテトが手付かずのまま冷蔵庫に残されていることを思い出した。

いくら食欲が無いとはいえ、付き合い始めた当日に彼氏に貰った土産のことを忘れていた自分が不思議だった。けれど風邪なのだから仕方が無いという気もした。いずれにしろ昨夜自分を抱きとめた存在を目の前に見てあたしの体は再び火照り始めた。

青びょうたんはベッドに腰かけたあたしの隣に腰を下ろすと

「心配だから、今夜泊まって行こうかな」

とあたしの顔を覗き込んだ。

「風邪、うつるよ」

「元々、俺がうつしたんだし」

「若菜さんの風邪菌、強力だよね」

「いや、ワカちゃん実は花粉症だったらしい」

今にして思えば、あたしはもっとその言葉に驚いても良かったよ

うな気がするのだけれど、あたしは大して気に留めずに
「そうなんだ。秋の花粉症の人いるもんね」
と返した。
そんなことよりもあたしは、青びょうたんが今夜泊まると言い出したことに気を取られていた。付き合いだした翌日に男と寝るなどという素早い展開はこれまでのあたしの人生に無いものだった。
早すぎやしないだろうか。軽い女だと思われないだろうか。
様々に逡巡しながらも、結局風邪で朦朧とした頭では何が適切で何が不適切なのかよく分からず、病気になった不安感から一人にされることが怖く、またスッピンに程近い顔を見られてしまった勢いから、結局その一時間後にはあたしはベッドの上で青びょうたんと重なっていた。
昨夜のめくるめくような官能の口づけとは比べ物にならない程、その夜のセックスは簡素なものだったけれど、しつこいセックスを仕向けられるとむしろ冷めてしまうあたしは、その物足りなさによりむしろ恋心に火を点けられた気分になった。
満腹できなかったからこそ、あたしはまた近い内に青びょうたんと寝たいと思った。そしてまた寝たいと思える相手が自分の恋人として隣に横たわっている事実を嬉しく思った。けれど青びょうたんは
「俺やっぱ、帰るわ」
と早々に体を起こした。
「泊まってくんじゃなかったの？」
「おふくろが、心配するし」
「電話すれば？」
「もう、寝てるよ」
枕元の目覚まし時計を眺めると十時を回っていた。こんな時刻にもう床に就くとは随分早いと思いながらあたしは
「もう寝てるんなら、泊まってったって別に心配しないんじゃないの」
と尋ねた。

だが青びょうたんは
「朝起きた時、俺が帰ってなかったら心配するから」
と言い張り帰って行った。
部屋に残されたあたしは、理不尽さを覚えながら青びょうたんのことを考えた。二十六の男が無断外泊をしたからといって心配するという母親のことがよく分からなかったし、その母親の心配を当然のこととして捉えている青びょうたんのことも、よく分からなかった。
だったらどうして、「泊まって行こうかな」などと口にしたのだろうと思った。泊まる気が無いなら最初から何も言わずにセックスだけすれば良かったじゃないかと思った。
いやそもそも今夜セックスをする必要があったんだろうか。風邪をひいて会社を休んだ付き合い始めたばかりの彼女と、どうしても今夜セックスをする必要があったんだろうかと思った。
要するに青びょうたんは、身勝手なマザコンなんだろうかと思い当たった。マザコンに実際に対峙するのはこれが初めてだなと思った。不思議と気持ち悪さは感じなかった。ただひたすらあたしは寂しかった。
にわかに渇望したあたしは、ベッド下に転がっていたレトルト粥を鍋にかけ冷蔵庫からスイートポテトを取り出した。奇妙な取り合わせのその食事は酷く不味かった。渇望ゆえに差し出された物を無理矢理腹に入れるのはとても不味い。そう思った。
翌日出勤すると、会社の人たちに
「風邪はどう？」
と尋ねられた。
「すっかり、治りました」
と答えると
「一日で完治するなんて、若いね」
と目を丸くされた。そんなものかと思った。年を取ると風邪が治り辛くなるのだろうかと思った。恋わずらいはどうなのだろう。そ

ちらも若ければ治りが早いのだろうか。
青　びょうたんからは昼頃に、「体調は？」と短いメールが入っていた。全快したので今日は出勤していると返すと
「今夜は仕事で遅くなるから、明日アパートに行くよ」
とレスが来た。
こちらの都合も聞かず、勝手に明日行くと宣言する青びょうたんに失望した。こんはず筈じゃなかったと思った。けれどならば一体どんなはずだったのかはよく分からなかった。
帰宅後、洗濯を済ませ入浴し夕飯を食べるとあたしは急に手持ち無沙汰になってふとイケメンに電話してみようかと思いついた。何だかそれはとても名案な気がして、あたしは早速教えられた番号をコールした。タイミング良くイケメンはアパートに一人だった。
「おう、どうした？」
機嫌良く尋ねる声が携帯から流れ、あたしはまず挨拶代わりに花粉症の容態を尋ねた。
「おう、病院行ったら良くなったぞ。最初は風邪かと思ったんだけどな」
もし最初から花粉症だと分かっていたら、あたしは青びょうたんとキスをしただろうか。付き合うことを決めただろうか。あたしはあの時ひょっとして、青びょうたんを通じてイケメンの風邪菌に感染したかったんじゃないだろうか。そんなことを思いながらしばらく花粉症の話をした後であたしはようやく
「あのさ、青島さんから聞いた？」
と尋ねた。
「付き合い始めたことか？」
「うん」
「ああ、昨日青島からメールで聞いた」
平坦なその声からはイケメンの思いが読み取れず、あたしはもどかしくなって「良かったと思う？」と質問した。
「何だよそれ。由真が良かったと思って付き合うことにしたんだろ」

「でも若菜さんだって、青島さんをあたしに合ってると思って紹介したんでしょ」
「俺はそんな話、知らねえなあ」
鷹揚に答えるイケメンにあたしはびっくり仰天すると
「だって若菜さんが、あたしに合う人がいるから紹介したいって言ってるって横内さんが…」
と言いかけたがイケメンは
「いつの話だ？」
と遮った。
「若菜さんち行った、次の日」
「俺は由真と横内が来た日の夜に、由真が男紹介して欲しがってて俺に頼んでくれって言われたって、横内から電話受けたんだけどな」
「それ、ホント？」
「そんなこと、嘘ついてどうすんだ」
確かにその通りだと思った。そんな嘘をついたところでイケメンには何の得も無い。加えて青びょうたんをあたしに紹介することにイケメンには何のメリットも無いのだ。
その時あたしは、あっと思い
「ねえ横内さんて、若菜さんのこと好きだったんじゃないの？」
と尋ねた。短い沈黙の後イケメンは
「まあ、付き合ってくれって言われたことはあるな」
と答えた。
「いつ？」
「由真と青島と横内と四人で飲んだ晩だっけな。うちに帰ってから電話かかってきた」
「あたしが若菜さんと、二回目に会った後？」
「そうだな」
「断ったの？」
「そりゃな」
その時あたしは、ようやく自分が横内さんに利用されていたこと

を悟った。横内さんは知り合ったばかりのイケメンと会う口実を作る為にあたしを利用しイケメンを口説く為に彼氏の存在を隠し、そしてあたしがイケメンを気に入ると、あたしの矛先を代えさせる為に青びょうたんを紹介させ、それでもあたしの気が変わらないと見るやその晩の内にイケメンに告白し、上手くいかなかったが故にイケメンを悪く言い、そして既存の彼氏の存在をノロケることにより虚勢を張ったのだ。

黙り込むあたしに対しイケメンは

「横内が何でそんな嘘ついたのかは知らねえけど、まあいいじゃねえか。結果的に由真が青島をいいと思って付き合ったんなら」

ととりなすように言った。あたしは「そうだね」とつぶやいた後「じゃあまた」と電話を切った。

確かにイケメンの言うことは正論だと思った。あたしは横内さんに利用され嘘をつかれたけれど、でも青びょうたんと付き合うことを誰に強制された訳じゃない。それはあたしの自由意志で決めたことなのだ。

けれど自由とは一体何のことだろうとあたしは思った。真の自由の中で選び取った選択なのだとしたら、あたしの気持ちはどうしてこんなにもざらついているんだろうかと。

あたしはぼんやりとベッドの上に横たわった。窓の外からリーリーと虫の声が響き渡り、イケメンのアパートへ行く道すがら耳にした虫の声を思い出した。

あの頃はまだ夏だったのに、虫の声も格別変わったようには思えないのに、季節はもう秋を迎え、そして横たわるベッドの上からは季節外れの栗の花の匂いが微かに立ち上っている。

もうどうしようもないのだと思った。青びょうたんとは付き合うことにしてしまったのだし、シーツには彼の体液の匂いが移ってしまった。自分の友人の体臭が移ったシーツにくるまれて眠る女をどうこうしようなどと思う男などまずいないだろうし、ましてや彼女持ちなら尚更だ。

あたしは諦めに似た気持ちで、自分は青びょうたんの彼女なのだと考えた。例えイケメンのお勧め物件ではないにしろイケメンの友人であるだけで青びょうたんにはそれだけの価値がある気がした。それだけで自分は、青びょうたんを愛していけるかも知れないと思った。

だがそれから三ヶ月も経たない内に、あたしは青びょうたんに振られてしまった。横内さんに騙されたショックや、イケメンへの想いや、青びょうたんの相変わらずのマザコン振りに、あたしが日を追うごとに情緒不安定になり、発作的に手首を切ったのが原因だった。

別れを告げられた時あたしは泣きながらすがったが、青びょうたんを引き止めることはできず、あたしは一日中アパートにこもって泣き続け翌日にはすっかり未練が消え失せた。どうやらあたしは青びょうたんのことを、たいして好きではなかったらしい。

けれど友人たちにあたしは随分心配された。手首を切ったりしてしまったのだからまあ心配するのは無理も無い。女友達の一人に気晴らしにと宝飾会社のファミリーセールに誘われ、あたしは了承した。腕時計を持たないあたしは左手首の傷を隠すブレスレットが欲しかった。

ボーナス後のクリスマス前ということで会場は混雑していた。あたしは女友達と連れ立って幾つかのブースを巡った。手首に刃を当てた時は、単なるリストカットのつもりではなく本気で死のうとしていたのに、こうしてきらめく宝飾品の数々を眺めていると物欲が湧いてくるから不思議だった。

とはいえまさか販売員に対して

「リストカットの痕を、隠せるようなタイプの物を探しているんですが」

とも言えず、あたしは販売員に見つからないようにこそこそとブレスレットを試着した。

ひょっとしたら傍目には、万引きを目論む女に見えたのかも知れ

ない。目の前に突然販売員が立ちふさがりあたしはぎょっとして顔を上げた。するとそこには懐かしい女の姿があった。
「麦子さん」と呼びかけると、彼女は少し驚いた様子で
「由真ちゃん？久し振りだねえ」
と小さく叫んだ後
「ちょっと、あっちで休まない？」
と来客用の喫茶コーナーを、プラチナらしきリングのはめられた指先で指し示した。
久し振りの再会と見て遠慮したらしい女友達が
「わたしは、一人で見てるよ」
と言うのであたしは麦子さんと二人で喫茶コーナーに向かった。
黒いパンツスーツで、あたしの前を颯爽と歩いて行く麦子さんの後ろ姿を眺めながら、そういえばこの宝飾会社に就職が決まったと言っていたなとあたしは思い起こした。バイト先に就職の報告に来た麦子さんと行き会って以来、彼女に会うのはおよそ二年ぶりのことだった。
喫茶コーナーの片隅に二脚のパイプ椅子を見つけると、麦子さんはどこからか運んできた紙コップ入りのウーロン茶を差し出しながらあたしに座るよう促した。相変わらずきびきびした動きだとあたしは感心した。
以前から男前な女と呼びたくなるくらいの、強さと美しさを持った人だったが、華やかな宝飾業界の空気を身にまとうことによりますます強さが際立ったようだ。あたしは多少の気後れを感じながら
「麦子さんがここに勤めてること忘れてて、びっくりしました」
と当たり障りの無い話を振った。
できれば自分のことは話したくないと思った。自殺未遂を図ったなどということは、こんなにも強く美しい人にとってはさぞ軽蔑される出来事に違いないと思った。自分からその話を持ち出さずとも近況を少しでも話してしまったら、麦子さんはあたしの弱さを嗅ぎ取りそしてあたしを嫌うのではないかという気がした。

あたしのつぶやきを受けて、麦子さんはしばらく会社やら今回のセールのことやらを話していたが、突然思い出したように
「どう？あれから場数踏んだ？」
と笑いながら尋ねた。
その時麦子さんのアーモンド型の瞳が妖艶に光り、あたしは何だか全てを見透かされているような気分になって
「そうですね。場数踏んだのか場数に踏まれたのかよく分かりません」
と答えた。抽象的な言葉で自分の近況をぼかしてしまいたかった。そして麦子さんの勧め通り、場数を踏む努力はしたのだと伝えることで麦子さんに媚びようとした。
だがあたしは
「何が、あったの？」
と問われたい思いも持っていたのだと思う。自分に自信が無く自分の話をしたくないくせに、一方では自分に興味を持って質問を浴びせて欲しいという願いも持っていたのだろう。
だからあたしは
「いいんじゃないの。踏まれたって。麦は踏まれて強くなるんだよ」
と答えた麦子さんに憤慨した。何だか適当に話を流された気分だった。
そこで思わず
「あたしは、麦じゃありません」
と強い反発の言葉が口をついて飛び出した。
けれどすぐさまあたしは後悔した。これではまるであたしとあなたは違うと敵対宣言をしたかのようだ。恐れを覚えながらも昔も今も麦子さんに憧れる思いは変わらないというのに、何故あたしはそんなことを口走ってしまったのだろうか。
しかし目の前の麦子さんは、別段機嫌を損じた様子も無く静かに微笑むと
「わたしもそう思ったよ。初めて名前の由来聞かされた時」

とつぶやいた。
あたしは思わず麦子さんの顔を見詰めた。何故あんな失礼なことを言ったあたしに不快を覚えないのかという疑問と、麦子さんも最初から自分の名前の意味を受け入れていた訳ではないという事実に、頭の動きが瞬時に停止したのを感じた。
その時遠くの方で、麦子さんを呼ぶ販売員の声がした。麦子さんは「行かなきゃ」と言いながら立ち上がったが、ふとあたしの顔を見詰め
「由真ちゃんの名前の由来って、何？」
と尋ねた。
「自由です。真の自由」
「じゃあ、場数に踏まれて強くなる麦みたいな生き方する自由もある訳だね。もちろん自分は麦なんかじゃないって言い張る自由もあるけどさ」
麦子さんはそう言ってニヤリと笑うと
「何か気に入ったのあったら言って来て。勉強したげる」
とあたしに耳打ちし去って行った。
その後ろ姿を見送りながら、あたしはふと麦子さんは最初から強かった訳ではなかったのかも知れないと思った。踏まれて強くなるなど真っ平だとか踏まれたって強くなんかなれっこないとか、今のあたしが抱いているこの思いを、乗り越えてきたのかも知れないと思った。
一体どうしたら麦子さんのように、踏まれることを肯定して強くなることができるんだろうか。どうしたら踏まれた痛みで倒れるのではなくそれをバネに成長できるんだろうか。
あたしはしばらくそこに腰かけたまま物思いにふけっていたが、やがて立ち上がると会場に戻り再び女友達と共に歩き回った。会場内は更に混雑が増し、人と宝飾品と思惑が溢れんばかりに飛び交っていた。
さっきまでブレスレットばかりを探していたあたしがアンクレッ

トのコーナーに向かおうとしたので、女友達はあたしが間違えているのだと思い
「由真、それ違うよ。足に付けるやつだよ」
と注意した。
「分かってる」
「ええ？」
「足に付けるのが、欲しいの」
会場内では多くのカップルが指に付ける印を捜し求めていた。女友達は自分の首に付ける印と手首に付ける印の間で揺れていた。あたしは足の印がいいと思った。手首にはもう自分で付けた印が刻み込まれている。この上、更に手首に印はいらないと思った。
細くてちぎれそうな繊細な輝きのアンクレットを選び出すと、あたしは麦子さんの姿を目で探した。そうしながらあたしはまだ胸の中にイケメンが住んでいることを感じていた。自分は馬鹿だと思った。こんな愚かな女は場数を踏むつもりでまたもや場数に踏まれてしまうだろうという気がした。
でもだとしたら、踏んで踏まれるこの足に印を付けてみるのはどうだろうか。
会場は先程より更に混雑していた。あたしは前に進むことにすら不自由を感じた。誰かの足があたしの足を踏んだ。痛さに足を引っ込めた途端あたしの足が別の誰かの足を踏んだ。
何だか人生みたいだと思った。

（後書き）

登場人物全てにモデルがいます。人物への感想などもお寄せ頂ければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3654t/

踏んで踏まれてアンクレット

2011年5月19日16時55分発行